

## 心理学におけるパラダイム転換と

### 今日のヴィゴツキー研究

教育心理学教室 高 取 憲 一 郎

Kenichiro Takatori\*: Paradigm transformations in psychology and present day's Vygotskian research. (*Journal of the Faculty of Education, Tottori University, <Educational Science>*, 1985, 27, 263-275)

#### 1. はじめに

チェコ出身の心理学者 Marková は、その著書『Paradigms, Thought, and Language<sup>(1)</sup>』において、今日までの主要な心理学において支配的であったデカルト派パラダイムを廃して、ヘーゲル派パラダイムへと転換すべきことを主張している。それは、人間を思考者としてよりも行為者としてとらえ、思考や意識も力動的にとらえることへの転換の必要性を説いたものである。

ところで、Marková のこのような主張に呼応するかのように、近年、国際的にもまたわが国においても、ヘーゲルから多大な影響を受けたソビエトの今世紀前半の心理学者ヴィゴツキーが新たな注目を集めている。たとえば、米国では、Wertsch や Cole を中心とするグループがヴィゴツキーの翻訳を世に送り出しているし<sup>(2)</sup>、ヴィゴツキー・レオンチェフ・ルリヤなどの理論を中心にしてソビエト心理学の紹介や論評のための単行本の編集が目につく<sup>(3)</sup>。また、ヨーロッパでもオランダの Veer を中心として、ヨーロッパの哲学的伝統をふまえた上でのヴィゴツキー研究、あるいはヴィゴツキー学とも呼びうるような注目すべき研究動向が見受けられる<sup>(4)</sup>。さらに、わが国においても、認知心理学者たちが、上に述べた米国の認知心理学者 (Wertsch, Cole など) の影響を受けて、ヴィゴツキーの理論をとり入れはじめている<sup>(5)</sup>。

ヴィゴツキーについて書かれたものを読めばわかるのだが、ヴィゴツキーは研究生活の初めのころは、デカルトやスピノザを愛読していたが、その後、デカルト派パラダイムにあきたらなくなり、ヘーゲルやマルクスの著作に親しむようになったと言われている。Marková の主張するデカルト派からヘーゲル派へのパラダイム転換は、今世紀初めのヴィゴツキーの著作の中にすでに明らかに認められるのである。それを、われわれは今までとりたてて気にもとめなかったのだが、近年になり心理学研究者の意識の前面にパラダイム転換の必要性が感じられはじめて、改めてヴィゴツキーの諸著作が見直されることになったのであろう。

\* Department of Psychology, Faculty of Education, Tottori University, Koyama-cho, Tottori, 680, Japan.

ヴィゴツキー・ルネッサンスとも呼ぶべきこのような現象は、ソビエトでも彼の全集が出版されたことにも見られるように、彼の母国ソビエトにおいても起ってはいるが、単にソビエト心理学内部における現象というよりも、世界的な心理学のあり方そのものにも関わるような底の深い大きな歴史の流れではないかと思われる。

そこで、本稿では、現在の世界で最も鋭くヴィゴツキー理論の本質をとらえ、さらに積極的に展開している2人の若手ヴィゴツキー学者である、オランダのVeerと米国のWertschの諸論文を参考にしながら、ヴィゴツキー理論を心理学のパラダイム転換ととらえたとき、どのような問題が解明すべきものとなって現われるのか、またそれは哲学的思想の流れからみればどのように位置づけられるのか、などを探っていくことにする。このような作業を通じて、わが国の心理学界の一部に見られる心理学という学問の商品化（もちろんこれは日本社会全体に浸透している商品化と無縁ではないが）と遊戯化から、わずかでも心理学を学問の側へ、科学の側へと引き寄せることに寄与できれば幸である。

それではまず、ヘーゲルの思想がヴィゴツキーにどのような影響を与えているか、ということから議論を始めることにしよう。

## 2. ヴィゴツキーにおけるヘーゲルの影響

オランダの若手ヴィゴツキー研究者であるVeerはヴィゴツキーの短い研究生活を4つの時期に区分している<sup>(6)</sup>。第1期は、1917年から1924年にかけてで、この時期には処女作である“芸術心理学”(1925)を世に問うた。これは、ロシアの言語学者ポテブニャの影響で言語の重要性を習得したヴィゴツキーがその成果をまとめたものであるが、この期は、言語や文学の研究以外にもデカルトやスピノザ、ドイツ古典哲学とマルクスの諸著作にも親しんだ。第2期は、1924年から1927年であり、“心理学の危機の歴史的意味”(1927)という注目すべき論文を著している。さらに、この期には、精神分析学やピアジェ心理学、ゲシュタルト心理学、哲学的教育学などの研究も行なっている。ただ、ここではゲシュタルト心理学とヴィゴツキーの関係についての最近の研究成果についてふれておきたい<sup>(7)</sup>。それによれば、ゲシュタルト心理学者Koffkaは、ルリヤたちが1930年代に中央アジアのウズベキスタンで行なった有名な調査に参加したということであり、KoffkaやLewinとヴィゴツキー、ルリヤの間にはデータの交換も実際に行なわれていたということである。その後、ようやく1930年代の末になって、ヴィゴツキーにより文化—歴史理論が具体化されるに及んで、ヴィゴツキー学派はゲシュタルト心理学の影響から解放されたという。第3期は1927年から1930/31年にかけてで、この期は、高次心理機能の発達の文化—歴史理論が提唱されたことが特徴である。第4期は、1930/31年であり、ヴィゴツキーの著作の中では最も有名であり、ごく最近まで欧米の心理学者にはヴィゴツキーといえどこれしか知られていなかった“思考と言語”に代表される時期である。この期は、ヴィゴツキーの研究の流れからみれば、子どもの言語行為および思考における認知的要因から、情動的・動機づけの要因への転換、そして記号そのものの研究から語の意義の研究への転換が図られた時期である。Veerは、以上の4つの時期のうち、従来ともすれば第3期、第4期に注目されがちであったが、初期の第1期と第2期の重要性をいささかも過少評価してはならないと考えている。そのわけは、とくにこの2つの時期に発展させられ成熟させられた哲学的、方法論的見解のなかに重要なものが数多く含まれると考えるからである。

ところで、Veerはヴィゴツキー心理学の諸カテゴリーの源流が誰にあるかを論じている<sup>(8)</sup>。それに

よれば、内面化はヘーゲルとジャネであり、とくにヘーゲルのVerinnerlichungにある。同様に、発生的分析はマルクスとブロンスキー、記号はポテブニャ、コミュニケーション(交通)はヘーゲル、心理機能の知性化はスピノザ、科学的概念と生活的概念ではヘーゲルである。さらに、ヴィゴツキーの発達観、なかんずく最近接発達領域という概念は、やはりヘーゲルの教育論から影響されたものであり、これは、ヴィゴツキーがルソーの教育論に対して批判的であったことと合わせ考えると興味深い。このようにヴィゴツキー心理学の重要な中核的諸カテゴリーの源流をざっと見渡しただけでも、ヴィゴツキーの初期2期における重要性、とりわけヘーゲルに対する依存度の大きさが明らかである。

Veer<sup>(9)</sup>はヴィゴツキーがデカルトからヘーゲルやスピノザの哲学へ転向したのは、心理学におけるデカルト的パラダイムに満足できなかったためであると指摘しているが、ヴィゴツキーがヘーゲルやマルクスと同じぐらい熱心に研究の対象とした哲学者にスピノザがいる。レヴィチンによれば<sup>(10)</sup>ヴィゴツキーのスピノザ崇拜の強さのために、多大な感化を受けて、ヴィゴツキーの妹ジナイーダ・セミョーノヴナは自分の専攻論文のテーマにスピノザ哲学を選んだほどであるという。

そこで、Veerの2つの論稿を紹介しながら、スピノザとヴィゴツキーの関係、および、ヘーゲルからともに影響されたヴィゴツキーとミードの類似性という問題についてふれておこう。わが国ではこのような形のヴィゴツキー研究というのは存在しないので、Veerの分析しているようなヴィゴツキーの知られざる側面については、今までわれわれは無知であった。それゆえに、われわれにとって貴重な知識を提供してくれるものである。

まず、スピノザとヴィゴツキーの関係からみていこう<sup>(11)</sup>Veerは、スピノザもヴィゴツキーも知的機能(intellectual function)すなわち思考(thinking)が全人格を制御するという考えを共有しており、また両者とも、知性による心理的過程の制御の拡大が人間が発達することであるとみなしていると述べている。すなわち、スピノザはその著“エチカ”のなかで、感情や熱情の奴隷であるような人間を特に斥けている。スピノザは、自分の情熱を制御し、了解しうる人間精神の能力のなかに、この制御が可能になる方途を見い出そうとしている。もし知性が、感情に関する明晰で紛れもない知識をもっていれば、知性は感情を制御することをしだいに学ぶであろう。最初は漠然たる原始的感情が、ついには知性により了解され、そのようにして感情は制御されるようになる。言葉の狭い意味において、われわれは、われわれの行なっていることを理解するかぎりにおいて行動するのである。

同様の見解がヴィゴツキーにおいてもみられる。もっとも、ヴィゴツキーは、以上のような考えをより心理学的に洗練し、感情以外のあらゆる心理過程にも広げたわけであるが。すなわち、ヴィゴツキーのいわゆる低次心理過程と高次心理過程の考えがそれである。たとえば、記憶は幼児では偶然的印象に依存する原始的で自然的な記憶であるが、個体発生の過程で思考、とりわけ言語行為が発達するにともない、記憶はしだいに構造化され制御されはじめる。いわゆる自然的記憶から論理的記憶への発達である。記憶を含むあらゆる心理過程の知性化が、言語行為の発達によって成し遂げられるとするこのヴィゴツキーの見解は、実はヴィゴツキー理論の批判点の1つになっているのだが、それについては後述することにする。スピノザにおける知性が、ヴィゴツキーでは言語行為に置き換えられているのは容易に見てとれる。しかし、実はこの点にこそ両者の差異があるのである。スピノザでは感情を理解することが、感情を制御するための十分条件であったが、ヴィゴツキーの場合は、高次の文化的感情を発達させるものは言語行為であり、自然的感情を制御するのも言語行為であり、さらに原始的な感情を倫理的批判へと高めるのも言語行為である。

以上の説明は、スピノザがヴィゴツキーに与えた影響の1つである知性主義 (intellectualism) についてであった。さて、影響の第2点は、一元論あるいは決定論ということである。スピノザは“エチカ”第3部の序言で次のように述べている<sup>(12)</sup>「感情ならびに人間の生活法について記述した大抵の人々は、共通した自然の法則に従う自然物について論じているのではなくて、自然の外にある物について論じているように見える。実に彼らは自然の中の人間を国家の中の国家のごとく考えているように思われる。なぜなら彼らは、人間が自然の秩序に従うよりもむしろこれを乱し、また人間が自己の行動に対して絶対の能力を有して自分自身以外の何ものからも決定されない、と信じているからである。」このような、自然の一部としての人間、自然の一部としての心理過程という理解は、ザイデルも指摘するように<sup>(13)</sup>デカルト問題の解決を準備したわけであるが、ヴィゴツキーに対しても大きな影響を与えないわけにはいかなかった。ヴィゴツキーは、スピノザの一元論的見解に触発されて次のように述べている<sup>(14)</sup>「弁証法的心理学にとっては、精神は、スピノザの表現を用いれば、自然以上のものではないし、あるいは国家の中の国家のようなものでもない。精神は自然そのものの一部であり、われわれの脳の機能すなわち高度に組織された物質と直接結びついている。すべての自然と同様に、精神は創られたのではなくて、発達過程において進化したのである。」

ただ、ここで1つ付け加えておきたいのは、ヴィゴツキーは研究生活の最後まで、低次心理過程と高次心理過程の区別と連関の問題では思い悩んだとされており、プルシリンスキーにいたっては、ヴィゴツキーは低次と高次の心理過程をあまりにも厳しく区分しすぎるとして、ヴィゴツキーを二元論者として批判している<sup>(15)</sup>。実は、この問題は十分に検討が加えられるべき重要な論点を含んでいるので、節を改めて述べることとして、ここでは、ヴィゴツキーがスピノザの一元論から影響を受けたことを確認するにとどめておく。

第3の影響は、知的道具の使用という点である。スピノザは、“知性改善論”において、真理を明示する方法が不可能なことを主張する懐疑論者たちを論駁して、次のような議論を展開する<sup>(16)</sup>「さてどんな種類の認識が我々にとって必要かを知っての上は、我々が認識すべきものをこうした認識によって認識する道すなわち方法が講ぜられなくてはならない。これがなされるためにまず注意すべきは、この際無限につづく探究はあり得ないということである。すなわち、真理探究の最上の方法を見出すためにはこの真理探究の方法を探究する他の方法が必要でなく、また第二の方法を探究するために他の第三の方法が必要ではない、このようにして無限に進む。実際こうした仕方では、我々は決して真理の認識に到達しないであろう、いや、およそどんな認識にだって到達しないであろう。この関係は確かに物的道具における関係と同じであって、この後者の場合同じ工合に議論がなされ得る。すなわち、鉄を鍛えるためにはハンマーが必要であり、ハンマーを手に入れるためにはそれを作らねばならず、そのためには他のハンマーと他の道具が必要であり、これを有するためにはまた他の道具を要し、このようにして無限に進む。しかしこうした仕方では、人間に鉄を鍛える力がないことを証明しようとしても無駄であろう。事実、人間は、最初には生得の道具を以て、若干の極めて平易なものを、骨折って且つ不完全にはあったが作ることが出来た。そしてそれを作り上げて後、彼らは他の比較的むずかしいものを、比較的少い骨折りで比較的完全に作り上げた。こうして次第に最も簡単な仕事から道具へ、更にこの道具から他の仕事と道具へ進んで、彼らはついにあんなに多くの且つあんなにむずかしいことを、わずかな骨折りで成就するようになった。それと同様に、知性もまた生得の力を以て、自らのために知的道具を作り、これから他の知的行動を果す新しい力を得、さらにこれらの行動から新しい道具すなわち一層探究を進める能力を得、こうして次第に進んでついには英知の最高峰に達するようになるのである。」

この引用部分は、ヴィゴツキーの有名なテーゼのうちの1つである、人間行動の基本的文化的形態としての道具と記号（言語）の使用を思い出させる。しかも、その発達という視点もすでにスピノザのなかに登場している。また、この部分は、第2の影響としてすでにふれた一元論あるいは決定論とも関連している。ザイデルが、この箇所の説明として述べているように、<sup>(17)</sup> 感性的一対象的活動における道具の発達、ならびに思考における知的道具の発達は、一個同一の思考する物体の、一個同一の自然の二つの作用様式であり、スピノザにおいては思考が独立した実体としてではなく、自然つまり実体の属性としてとらえられていたことの現われであり、まさしくここにこそデカルト問題の解決が存していたからである。

以上見てきたように、スピノザはヴィゴツキーの理論形成にわれわれが想像していた以上に深く浸透していたことが明らかである。この点を鋭く分析したVeerの功績は大きい。

次に、ヴィゴツキーとミードの類似性へと話を移そう。<sup>(18)</sup> ヴィゴツキーもミードもともに社会的相互作用から精神の発生をとらえる点で、きわめて類似しているわけだが、Veerによれば、彼ら2人ともデカルト哲学の二元論に反発してヘーゲル哲学へ転向したということで、この点でも同様の軌跡——デカルトからヘーゲルへのパラダイム転換——を描いている。もっとも、ヴィゴツキーの場合には、ヘーゲルに加えてスピノザ、さらにマルクス、エンゲルスの弁証法的唯物論に媒介されているし、ミードの場合には、ヘーゲルに加えてジェームズ、デュイなどのプラグマティズムに媒介されていることは周知のとおりである。

さて、それでは両者の類似性について具体的にみていこう。ミードの“精神・自我・社会”の中の以下のような一節、すなわち「ヴントがしたように、まず精神の存在を前提とするならば、精神の起源や精神間相互作用は神秘的なものになってしまう。しかし逆に、社会的な経験過程が精神の存在より以前にあると考え、精神の起源を社会的過程における個人間の相互作用から説明するならば、精神の起源も精神間相互作用も神秘的で不可思議なものではなくなる。精神は、社会的過程あるいは経験の文脈における身ぶりの会話によるコミュニケーションを通じて発生するのであり、コミュニケーションが精神を通じて発生するのではない<sup>(19)</sup>」という部分が、ヴィゴツキーの精神間機能から精神内機能への発達、すなわち社会的平面から心理的平面への移行という見解と一致していることを見てとるのは容易であるし、常識的である。ところが、Veerはそこで分析をとどめないでさらに進んでいく。それは、コミュニケーションにおける語の意義の問題に関わる重要な提起を含んでいる。

すなわち、上述した類似点とも半ば以上重複するのだが、Veerによれば、ミードは精神の起源の問題について“声身ぶり” (vocal gesturs) という概念を提出している。<sup>(20)</sup> それによれば、子どもは絶えず身ぶりを産出し、そうすることにより周囲の大人を刺激している。大人はこの身ぶりを身ぶりとして解釈し、適宜それに対して働きかえす。子どもの発達のある時点で、子どもは自分の身ぶりが意味をもっていることを理解する。そうすれば身ぶりは子ども自身にとって意味をもつことになる。

これと同様の場面が、ヴィゴツキーにおいても「高次精神機能の社会的発生」として指示身ぶりを例として描かれている。<sup>(21)</sup> ヴィゴツキーは、この箇所を、子どもの文化的発達の3つの基本的段階と呼んで、ヘーゲルの行なった分析を利用するならばとして次のように述べている。簡略化するために、要約して記すことにする。指示身ぶりの発達には3段階ある。第1段階は、子どもは何かを把握しようとして手を空中にさし出すが失敗する。第2段階は、第1段階のさし出された手の状態を母親が解釈して子どもを助けてやることからくる状況の本質的変化である。子どもの把握動作の

失敗は、動作の対象からは何の反応もひき起さなかったのに、母親という他人から反応があったわけである。つまり、母親は子どもの運動を指示として意味づけたのであり、その場の状況の中に他人により初めて意味がもちこまれたのである。ここでは、指示身ぶりは他人のための身ぶりになっている。第3段階は、子ども自身が自分の身ぶりを指示としてとりあつかいはじめる段階である。すなわち、自分の身ぶりの意味を理解する段階である。要するに、初めは他人のために存在した意味が自分自身のために存在するようになった、すなわち、他人を介して自分自身の意味になったわけである。

この箇所は、ミードのすでに述べた部分との類似性のゆえに重要なばかりではなく、その中でヴィゴツキーが前言語的段階における大人と子どもの相互作用を扱っているという点においても検討の価値がある。というのは、ヴィゴツキー理論に対する批判の1つに、ヴィゴツキーは社会的相互作用を言語行為を伴うもののみ限定しているというものがあり、<sup>(22)</sup>それに対する反論にもなるからである。ヴィゴツキー自身は、指示身ぶりは子どもの言語発達においてきわめて重要な役割を演じ、行動のあらゆる高次の形態の非常に古い期礎であると述べて、指示身ぶりと言語発達の連関を主張し、さらに、上に述べた子どもの文化的発達の3つの基本的形態を言語行為の発達の3つの基本的形態と同一なもののみなしている。すなわち、「まず最初、語は、意味をもたなければならない。すなわち、事物との関係を持ち、語とそれが意味するものとのあいだに客観的関連ができねばならない。それがなければ、語のそれ以上の発達は不可能である。その後、この語と事物とのあいだの客観的結合は、大人によって子どもとのコミュニケーションの手段として機能的に利用されねばならない。その後でのみ、語は子ども自身にとっても意味をもったものとなる。語の意義は、このようにしてはじめは他人にとって客観的に存在するものであり、そと後子ども自身にとっても存在しはじめるのである。大人と子どもとの言語的コミュニケーションのあらゆる基本的形態は、後になって精神的機能となる。<sup>(23)</sup> この箇所の語を、先に述べた指示身ぶり置き換えれば、語と事物(すなわち語の意味するもの)と意義の3つの構造と同様の構造が、指示身ぶりと事物(すなわち指示身ぶり動作が把握しようとした対象)と意味の間の構造として見い出される。

以上のように、大人と子どものあいだにとり行なわれる社会的相互作用による高次精神機能の社会的発生のメカニズムを解く鍵概念を、語の意義の獲得に求めたのは、Veerの卓越した洞察力のたまものであるが、Wertschもさすがにここに着目している<sup>(24)</sup> Wertschによれば、大人と子どもの相互作用のなかで子どもが学習するものは語の意義(word meaning)である。子どもをとりまく社会環境とは、体系的な意義のシステムから成る言語共同体(speech community)であり、語の意義はこのような共同体において存在している。さらに、語の意義の学習は、レオンチェフの言うところの内的平面の形成を意味している。また、Wertschは、マルクスの資本論の方法とヴィゴツキーの方法の類似性を探究するときの鍵は語の意義にあるという注目すべき論点を提出しているが、<sup>(25)</sup>この問題は、研究の分析単位の問題、さらには活動と交通の問題にも関連をもってくる重要な論点なので、後ほど検討を加えよう。

さて、以上少し長く述べてきたように、ミードとヴィゴツキーの間には大きな類似性が見られるのであるが、これは、両者がともにヘーゲルの哲学、とりわけ“精神現象学”から大きな影響を受けているためだとVeerは述べている。Veerによれば、ヘーゲル“精神現象学”では、対人間相互作用のないところでは自己も自己意識もないという考え方が主張されているし、またヘーゲルにとっては、自己は決して直接的に与えられたものではなくて、社会的につくり出されたものである。

ミードとヴィゴツキーは、ともに直接的にヘーゲルから影響されている面と、ミードの場合はプ

ラグマティズム、ヴィゴツキーの場合はマルクス主義の屈折を経たヘーゲルから影響を受けている面の両面を合わせもっているのが特徴であると、Veerは結論づけている。

これまでのところで、ヴィゴツキーへのヘーゲルの影響については十分認識していただけたと思う。そこで、次に節を改めて、今日のヴィゴツキー研究の動向のなかから問題となっている論点をとり出し検討を加えてみよう。

### 3. ヴィゴツキー研究における論点

この節は、オランダのVeerと米国のWertschの所説をとりあげて、現在彼ら2人が何をその問題意識としているかをみていくことにする。彼らは2人とも30才代の若手ヴィゴツキー研究者であり、その旺盛な研究活動と鋭い研究対象への切り込み方という点において、今日世界で最も優れたヴィゴツキー学者であると思われるからである。

Veerは、ヴィゴツキー理論に向けられた批判として、①経験論、②観念論、③折衷主義の3点をあげ、①と③は根拠薄弱であるが、②は将来の検討課題であると述べている<sup>(26)</sup>。それはどういうことかということ、観念論であると批判する人たちはヴィゴツキーの記号の理論はレーニンの反映論、すなわち、思考を高度に発達した物質の産物とみなし、思考と物質は切り離すことができないとした理論と矛盾すると考えるのである。周知のように、ヴィゴツキーによれば、社会的相互作用(交通)の過程において記号(語の意義)は大人から子どもへと伝達される。しかし問題は、いかにしてこれらの記号が物質に関係するか、物質を反映するかが明らかではない。さらに、もし文化が記号を介して大人から子どもへと伝えられるとするならば、精神の発達の起源は主体-客体の相互作用の結果というよりも主体-主体の相互作用の結果とみなされる。“思考と言語”の初版の編者コルバノフスキーも、序文ですでにこのことを指摘している。すなわち、彼によれば、ヴィゴツキー理論における記号は労働や実践的活動と結びついていない、と。以上がヴィゴツキーを観念論とみなす論調である。また、Veerは他の論文で<sup>(27)</sup> ヴィゴツキー理論がスターリン時代に抑圧されたのは、以上見てきたように記号(語の意義)と物質の結びつきが不明であり、子どもの発達が物質世界とは無関係に、大人と子ども間の社会的相互作用の結果とみなされたこと、そのためにヴィゴツキーの主体-主体アプローチは観念論だとみなされたためであると述べている。Veer自身は、そのような批判からヴィゴツキー理論を擁護することは可能だと考えているが、彼によれば、ヴィゴツキーの弟子たちは擁護するかわりに、ヴィゴツキー理論の誤りを批判するという立場をとった。それがレオンチェフを代表とするハリコフ学派の活動理論であった。

さて、レオンチェフのヴィゴツキー批判は“活動・意識・人格”の中で激しく行なわれているが、もう少し後でくわしく検討することにして、ヴィゴツキー理論に対する別の批判点をみてみよう。

VeerとIJzendoornは、ヴィゴツキーが高次心理過程と低次心理過程とを区別したことに對して厳しく批判している<sup>(28)</sup>。ヴィゴツキーによれば、高次心理過程とは、たとえば、論理的記憶、創造的イマジネーション、言語的思考、意志による行為の制御などの、いわゆる文化的・能動的過程であり、低次心理過程とは、たとえば、直接的知覚、不随意的記憶、前言語的思考などの、いわゆる自然的・受動的過程である<sup>(29)</sup>。そして、前者の高次心理過程は記号により媒介されており、その起源は社会的である。すなわち、大人と子ども間の社会的相互作用の結果であり、言語行為が関与しているかいないかが、両者を分ける決定的な分水嶺である。

このヴィゴツキーの見解に対して、Veerたちは次のように批判する。すなわち、ヴィゴツキーは

精神発達における文化の影響は、社会的相互作用のみによって与えられると考えているが、そうではなくて、子どもが周囲の事物ととりかわすモノと子どもとの間の能動的相互作用も忘れてはいけない。この相互作用を通じて、子どもは環境に関する知識を獲得し、それによって心理過程（とくにヴィゴツキーのいわゆる自然的過程）が発達させられるのだからである。

さらに、Veerたちは、ソビエトの心理学者たちからも次のような3点にわたる批判が、この点に関して行なわれていると述べている。それは、まず第1に、ハリコフ学派（レオンチェフ、ザポロジェッツ、ボジョヴィッチ、ガリペリン、ジンチェンコなど）の行なったもので、ヴィゴツキーは、低次心理過程を自然的とか受動的とみなしたが、それは実は誤りで、たとえば知覚も知覚的行為としてとらえられねばならない例にみられるように、能動的なものである。第2に、ヴィゴツキーは社会的相互作用を言語行為に媒介されるもののみ限定しており、内面化が開始される以前の社会的相互作用（たとえば、ブラジルトンとかブーロフなどの研究している前言語的段階の社会的相互作用など）を無視している。この点も、ヴィゴツキーが、言語行為の要素の入っていない心理過程は自然的で生物学的であるとする見解に由来している。第3に、以上みてきたように、低次と高次を厳然と区分することは、新たな二元論をもちこむ可能性がある。もちろん、ヴィゴツキー自身は、本稿の第2節においてすでに述べたように、二元論には反対しているわけだが、プルシンスキーの手にかかれば、ヴィゴツキーは二元論者にされてしまうのである。

このように、ヴィゴツキーは精神の発生と発達における言語行為の役割を強調したのに対して、彼の弟子たちは、言語行為に代えて活動の役割を前面に出すことにより、1930年代にヴィゴツキー理論が観念論と批判された事態を避けた、とVeerたちは考えている。さらに、Veerたちは、ヴィゴツキーの精神発達への主体-主体相互作用アプローチは、主体-客体アプローチを無視ないし弱めるということにより、マルクスとエンゲルスの見解に反すると述べている。

以上のような論義には、Veerの共同研究者であるIJzendoornの意見が影響していると思われる。というのは、IJzendoornは現在はVeerと同じオランダのライデン大学の教授であるが、出身はHolzkampの主宰するベルリン自由大学であり、レオンチェフ理論に依拠するCritical Psychology (Berlin School)の陣営に属するからである。

そこで、レオンチェフのヴィゴツキー批判を検討しておくことが、実はVeerとIJzendoornのヴィゴツキー批判の核心を解く鍵でもあるし、また最初にふれたヴィゴツキー理論は観念論であるとする説の根拠を明らかにすることにもつながるのである。

レオンチェフは、“活動・意識・人格”の第3章においてヴィゴツキー批判を展開しているが、その少し前の部分ではルビンシュテイン批判を行なっている。レオンチェフの活動理論からみれば、ヴィゴツキーもルビンシュテインも同様の欠陥、すなわち活動の概念によって理論全体が一貫して統一的にとらえられていないという欠陥をもっているとされるわけであるが、まずルビンシュテイン批判の部分にふれておこう<sup>(30)</sup>

ルビンシュテインは、実践的活動は心理学の研究対象であるが、それは実践的活動が感覚、知覚、思考など要するに主体の内的な心理過程、心理状態という形をもった独自の内容として心理学の研究対象となるにすぎないと主張するが、レオンチェフによれば、それは一面的な考え方である、とされる。なぜならば、ルビンシュテインの見解では、主体のあらゆる内的な心理過程の内容や成立の経過に活動が関与しているという根本的な事実が捨象されているからである。つまり、内的な心理過程を研究しようとするれば、その内的過程を生み出した外的な対象的活動を研究せざるをえないのであり、研究対象に含めざるをえないのである。ここでレオンチェフが述べていることは、要す

るに、外的活動も内的活動もともに心理学の研究対象であるべきであって、たとえば内的心理過程を含むかぎりでの外的対象的活動のみを研究対象にすべきであるとか、あるいは心理学研究は外的活動そのものの研究にまで手をのばさなくともよいとかとする見解は誤りであるということである。なぜならば、活動は、対象的現実の中に主体を置き、この現実を主観性という形に変換するという機能をもっているがゆえに、活動（内外を区別しない）が心理学の対象になるからである。

次にヴィゴツキー批判をみてみよう。<sup>(31)</sup> レオンチェフは当然のことながら、ヴィゴツキーの語の意義についてのまさにヴィゴツキー理論の中核にメスを入れる。レオンチェフによれば、語の意義というのは活動の中の一部を切り取っているだけにすぎず、意義の研究をすすめていっても、たとえば思考過程についてはなるほど少しは解明できるかもしれないが、思考過程のすべてにわたって解明がすすむとは考えられない。思考過程といえども意義を媒介にして解明できるよりもはるかに広大な内容を有するものであり、ヴィゴツキーも“思考と言語”の中で認めているように、意義のみに頼っているのは動機づけの側面、情一意領域までカバーできない。そこで、もう一度問題をひっくり返さねばならない。すなわち、対象的活動というカテゴリーに回帰し、このカテゴリーを内的な過程、つまり意識の過程にまで押し広げなければならない。Zinchenkoの表現を借りれば、意義は精神の分析単位にはならない。道具に媒介された行為(tool-mediated action)こそが精神の分析単位になるのである。<sup>(32)</sup>

初めに述べたルビンシュテイン批判と同様に、レオンチェフの考えは外的活動と内的活動は共通な活動であり、意義も活動の一部として考えられなければならない、意義だけの突出は誤りであるということである。レオンチェフにおいては、内的活動は外的活動から生まれたものであって、両活動は原則的に結びついており、相互移行的関係にあるのである。要するに、従来のデカルト・ロック主義的分割法であるところの、外的・肉体的活動の属する外的世界と内的・心理的世界という図式は、対象的実在とその観念化され転化した形態と主体の活動(内的、外的活動の双方を含む)という分割法に席をゆずらねばならない。

以上見てきたように、Veerたちの批判点はレオンチェフにその理論的背景をもちながらも、ヴィゴツキー理論における言語行為至上主義をついたものであり、ひと言でいえば、社会的相互作用から活動への重心移行によりヴィゴツキーの欠陥、すなわち観念論的側面を補おうとするものである。

一方、Wertschはこれとはまったく対照的に、ヴィゴツキーの本質的部分である社会的相互作用と語の意義の理論を積極的に押し広げようとする。Wertschが、語の意義にヴィゴツキー理論とマルクスの資本論の方法論的類似性を解く鍵を見出し、まさにZinchenkoのいうところの分析単位として意義を重視していることはすでにふれた。さらに別の論文においても、<sup>(33)</sup> Wertschは分析単位として言語的コミュニケーション(linguistic communication)をあげている。そこでは、行為(action)を分析する3つのレベルとして①個人的レベル、②微社会学的レベル、③巨社会学的レベルの3水準を設定して、これら3水準を統合するものとして言語的コミュニケーションを考えている。<sup>(34)</sup> このWertschの構想はまだ素描的なものにすぎず今後の展開が待たれるが、いずれにしてもWertschの場合は、言語的コミュニケーション、言語行為、語の意義といった、すでにみてきたように、ヴィゴツキーが観念論であるとして批判されている部分を突出させて今後の研究構想を思い描いているのである。

#### 4. 今後の問題

さて、前節の議論をひと言でまとめてしまえば、活動と交通をめぐる問題として一括されるよう

に思われる。かつて筆者は、ソビエトで行なわれたレオンチェフとロモフを中心とする活動と交通論争について紹介したことがある<sup>(35)</sup>。しかし、本稿の文脈のなかで新たな視点からあの論争をながめてみれば、レオンチェフ理論に対するヴィゴツキー理論の側からの批判であり、それに対するレオンチェフ側からの反批判であったと位置づけられるように思われる。

ところで、かの論争は明確な決着のつかぬうちになんとなく立ち消えになってしまった感があるが、われわれとしては少なくとも前節で問題にされた論点についてだけはなんらかの方向性を示しておきたいものである。その糸口を、わが国の哲学者たちの最近の研究に探ってみることにする。

言語哲学者尾関周二は、“言語と人間”の中でわれわれがここで必要とする議論の材料を与えてくれている<sup>(36)</sup>。尾関によれば、語の意味(われわれの用語では語の意義)は、反映論とコミュニケーション論の両方の観点から統合的につかわれるべきであるという。すなわち、指示身ぶりを発生的背景にもつ対象指示機能と、相互的身ぶりを発生的背景にもつ社会的規範機能・調整機能の両者が統合されたところに語の意味が生まれるとされる。われわれのこれまでしてきた議論にひきつけて考えると、論の意義というのは、単にコミュニケーション過程のみに関与しているのではなく、モノを反映する対象指示機能も合わせもっているのである。その点で、記号(語の意義)はモノと結びついていないというすでに紹介した批判は当たらないであろう。

さらに尾関の議論を追ってみよう。尾関は、労働と言語的コミュニケーションの関係については次のように考えている。「われわれの見地からすると、一方でプラグマティズムを哲学的背景にもつコミュニケーション論者の多くは、社会生活の全体的理解のためにはあまりに〈労働〉を軽視・無視しているように思われるし、他方で、従来のマルクス主義の通念は、逆に〈コミュニケーション〉を軽視・無視しているように思われるのである。しかも、後者にかんして問題なのは、しばしば労働が人間にとって重要な意義をもつという当然の確認をテコに、あらゆる人間活動を労働活動の構造をモデルにして理解しようかのような論調がこれまで多く見受けられることであろう。<sup>(37)</sup>

さらに、労働と言語的コミュニケーションの差異として、(1)道具は操作主体にとって外的存在であるのに対して、言語記号は内的存在であること、(2)労働の場合は、人間の側からの労働対象への働きかけはつねに自然科学的意味での因果関係という性格をもつものに対して、言語的コミュニケーションの場合は、話し手から聞き手への働きかけは決して対象の法則的因果を認識し、それをふまえた上での働きかけではない、ということが指摘されている。

以上のことから尾関は、労働は〈共同化〉をともなう〈対象化活動〉であり、言語的コミュニケーションは〈対象化〉をともなう〈共同化活動〉であるとする。そして、両者をこのように理解することにより、おのおのはその独自性をもちつつも、また不可分に内的な仕方に関連していると考えるのである。

このように見てくると、前節のVeerやWertsch、さらにはレオンチェフなどの見解は、いずれも労働とコミュニケーション(交通)の一面的な理解から生ずる一面的な見解であるというそしりはまぬがれない。ただ、第2節で引用したヴィゴツキーの指示身ぶりに関する記述の部分は、尾関の言う労働とコミュニケーションの統合という視点からみても、再度検討を要すると思われる。というのは、モノを指示する運動(指示身ぶり)に対して、他人との相互作用のなかで他人から意味が与えられるとヴィゴツキーは述べるわけだが、そこには、大人と子どもとのコミュニケーションばかりではなく、指示身ぶりというモノを指向する、すなわち反映する活動も当初から存在していることが明らかに語られているからである。ヴィゴツキーの考える社会的相互作用は、主体-主体の関係だけではなく、主体-客体の関係も初めから含んでいるのである。また、この点では、Veerが

ヴィゴツキーの最近接発達領域を説明するときの記述の中にも同様の見解が認められる<sup>(38)</sup> すなわち、Veerによれば、最近接発達領域とは、大人と子どもの社会的相互作用のなかで、子どものもつ生活概念が大人のもつ科学的概念によって変形され、より高次の水準に引き上げられることである。一般的に、大人と子どもの相互作用においては、子どもとモノの関係により獲得された生活概念と子どもと大人の関係により獲得された科学的概念が織り合わされている。このようにVeer自身もヴィゴツキーの社会的相互作用を主体—主体関係と主体—客体関係の両者が織り合わされた構造としてとらえているのである。

以上述べてきたことから考えても、私見によれば、ヴィゴツキー理論においては、もともと労働とコミュニケーション（交通）が統合的にとらえられており、また語の意義にしても反映論とコミュニケーション論の視点が統合されていると思うのである。

いずれにしても、心理学におけるパラダイム転換を関題にすると、われわれはヴィゴツキーを徹底的に研究し、彼の提起した古くて新しい問題を現在の地点から再検討することが必要になってきている。それは、ヴィゴツキーにおいて、デカルト的パラダイムからヘーゲル的パラダイムへの転換が行なわれたという理由ばかりではなく、ヴィゴツキー自身の夭逝のために完全には行なわれなかったと思われるヘーゲル的パラダイムからマルクスのパラダイムへの転換がヴィゴツキーにおいて生じていたからである<sup>(39)</sup>。

## 注

- (1) Marková, I., *Paradigms, Thought, and language*, Chichester, John Wiley & Sons, 1982.
- (2) たとえば, Vygotsky, L. S., *Mind in society : The development of higher psychological processes*, Cambridge : Harvard University press, 1978.
- (3) たとえば, Wertsch, J. V. (ed.), *The concept of activity in Soviet psychology*, New York : Sharpe, 1981. また, 1980年シカゴで開催されたヴィゴツキーに関するシンポジウムをもとにしたWertsch, J. V. (ed.), *Culture, communication, and cognition : Vygotskian perspectives*, New York : Cambridge University Press, 1985.
- (4) Veer, R. van der, *Cultuur en cognitie : De theorie van Vygotskij*, Wolters-Noordhoff Groningen, 1984. IJzendoorn, M. H. van, Veer, R. van der, *Main currents of critical psychology : Vygotskij*, Holzkamp, Riegel, New York : Irvington, 1984.
- (5) たとえば, 波多野誼余夫(編), 認知心理学講座4, 学習と発達, 東京大学出版会, 1982 所収の稲垣佳世子論文, 三宅なほみ論文, また, 天岩静子(編) ピアジェ派心理学の発展II, 国土社, 1982 所収の佐伯胖論文などを参照。
- (6) Veer, R. van der, Early periods in the work of L. S. Vygotskij : the influence of Spinoza, In M. Hedegaard, P. Hakkarainen & Y. Engeström (eds.) *Learning and teaching on a scientific basis*, Aarhus : Psykologisk Institut, 1984. およびIJzendoorn, M. H. van, Veer, R. van der (1984).
- (7) Scheerer, E. Gestalt psychology in the Soviet Union I. The period of enthusiasm. *Psychological Research*, 1980, 41, 113—132. Scheerer, E. Luria memorial issue (editorial). *Psychological Research*, 1980, 41, 101—102.
- (8) (6)に同じ
- (9) Veer, R. van der, Similarities between the theories of G. H. Mead and L. S. Vygotskij : an explanation? Lezing gehouden op de Third Annual Meeting of Cheiron Europe, Rome, September 1984.
- (10) レヴィチン, ヴィゴツキー学派: ソビエト心理学の成立と発展, モスクワ, プログレス出版社, 1984.
- (11) (6)に同じ
- (12) スピノザ, エチカ(上), 出波文庫, 165頁。

- (13) ザイデル, マルクス主義とスピノザ主義, 唯物論, 8号, 1977, 157頁。
- (14) ヴィゴツキー, 全集 I, モスクワ: ペダゴギカ, 1982, 137頁。(露語)
- (15) (4)のIJzendoorn, Veer (1984)およびVeer, R. van der, & IJzendoorn, M. H. van, Vygotskij's theory of the higher psychological processes: some criticisms, *Human Development*, 1985, 28, 1-9.
- (16) スピノザ, 知性改善論, 岩波文庫, 28-29頁。
- (17) (13)と同じ
- (18) (9)と同じ
- (19) Mead, G. H. *Mind, self and society*, Chicago: University of Chicago Press, 1934, p. 50.
- (20) Mead, G. H. *The philosophy of the present*, Chicago: University of Chicago Press, 1980, および*The individual and the social self*, Chicago: University of Chicago Press, 1982.
- (21) ヴィゴツキー, 柴田義松(訳), 精神発達の理論, 明治図書, 1970, 210-212頁。
- (22) (15)のVeer & IJzendoorn (1985) および(4)のIJzendoorn, Veer (1984)。
- (23) (21)のヴィゴツキー (1970), 212頁。ただし訳文は一部変更した。
- (24) Wertsch, J. V. & Stone, C. A., The concept of internalization in Vygotsky's account of the genesis of higher mental functions, In J. V. Wertsch (ed.) *Culture, communication, and cognition: Vygotskian perspectives*, New York: Combridge University Press, 1985, pp. 162-179.
- (25) Wertsch, J. V. Introduction, In J. V. Wertsch (ed.) 1985, pp. 1-18.
- (26) Veer, R. van der, In defence of Vygotskij: an analysis of the arguments that led to the condemnation of the cultural-historical theory, Paper presented at the second Cheiron Europe conference on the history of the social and the behavioral sciences, Heidelberg, september 1983.
- (27) Veer, R. van der, Vygotskij and activity theory, Liden, april 1985.
- (28) (15)のVeer & IJzendoorn (1985)
- (29) 東独のKlixもヴィゴツキーの低次, 高次心理過程に対応すべき2種の学習タイプを分類している。Klix, F., Are learning processes evolutionary invariant? An unproved assumption in psychology of learning revisited, *Z. Psychol.*, 1982, 190, 4, 381-391.
- (30) レオンチェフ, 活動と意識と人格, 明治図書, 1980, 75-76頁。
- (31) 同上書, 81-83頁。
- (32) Zinchenko, V. P., Vygotsky's ideas about units for the analysis of mind, In J. V. Wertsch (ed.) 1985. pp. 94-118.
- (33) Wertsch, J.V. & Lee, B., The multiple levels of analysis in a theory of action, *Human Development*, 1984, 27, 193-196.
- (34) もう少しくわしい検討は, 拙稿 ソビエト心理学における言語の問題: ヴィゴツキー学派を中心にして, 現代と唯物論, 9号, 1985, 40-57頁を参照。
- (35) 拙稿「活動と交通」論争についての一考察, 心理科学, 1981, 4(2), 1-7。
- (36) 尾関周二, 言語と人間, 大月書店, 1983。
- (37) 同上書, 160-161頁。
- (38) (4)のIJzendoorn, Veer (1984) の58-62頁。
- (39) この点で, 尾関 (1983) のヘーゲルの〈対象化〉の典型が言語的精神活動におけるそれに見られるのに対し, マルクスの〈対象化〉は物質的生産労働活動において見られるとする指摘(184頁)は示唆的である。

## Abstract

Marková (1982) insisted the necessity to transform the psychological studies from Cartesian paradigms into Hegelian paradigms.

In the early periods in this century, Vygotsky already transformed his ideas from Cartesian framework into Hegelian framework, and also into Marxian framework.

Today, there are two points under discussion in the Vygotskian research. First, Vygotskian theory is an idealism, because he strongly stressed the importance of social interaction, communication and word meaning. That is, his subject-subject approach is idealism, and it is necessary for us to restore subject-object relations, namely, activity. Second, on the contrary to the first, word meaning and linguistic communication are thought to be the key concept for approaching the human behaviors.

However, these two points have common shortcomings. That is, word meaning is not seen as the unification of reflection and communication, and labour and communication are not seen to be relatively independent but innerly related each other. That is, labour must be understood to be <objectifying activity> with <collaboration> , and linguistic communication must be understood to be <collaborating activity> with <objectifying> .

It is necessary for us to recognize the Vygotskian theory from the stand point of unification of labour and communication, because Vygotskian theory has enough view points as such.

(昭和 60 年 9 月 16 日受理)

